

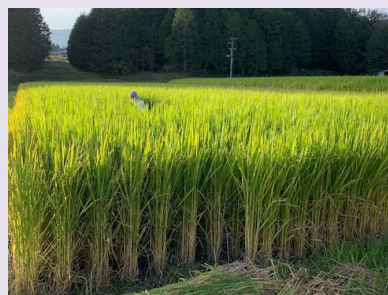
【全体概要】

県内の飼料用稲生産組織では、畜産農家から要望のある極短穂茎葉型の飼料用稲の生産が増加している。一方、面積の拡大に伴い収穫作業が集中するといった課題も出てきている。そこで、従来品種の「たちすずか」に比べて籾重量がさらに少なく高品質化が期待できる新品種「つきすずか」を導入するとともに、収穫時の作業分散を目的とした新品種「つきことか」等を組み合わせた体系を確立し飼料用稲の生産拡大の普及を図る。

新品種・新技術等の概要

「つきすずか」の品種特性

- ・農研機構西日本農業研究センターで育成
- ・晩生で、出穂は「たちすずか」と同程度
- ・「たちすずか」より籾重は少なく収量は同程度



つきすずか

「つきことか」の品種特性

- ・農研機構西日本農業研究センターで育成
- ・極晩生で「たちすずか」より3週間出穂が遅い
- ・極長稈で収量は「たちすずか」より2割多収

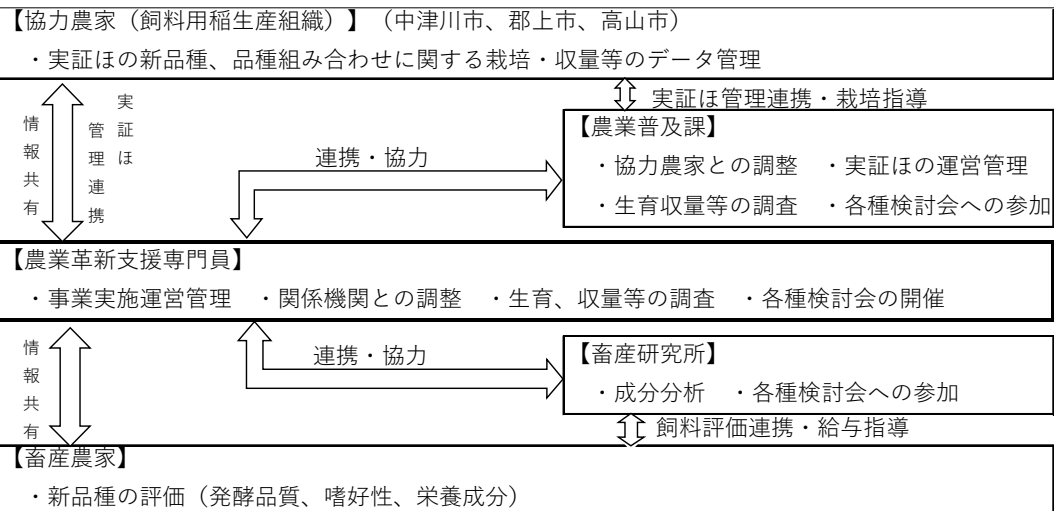


稲WCSの収穫

主な取組内容

- ・実証ほ設置による新品種の特性把握(低籾重、増収効果)
- ・品種の組み合わせによる栽培体系確立(収穫作業分散、栽培面積拡大)
- ・新品種稲WCSの成分分析による品質評価
- ・新品種導入と品種組み合わせによる地域に適した飼料用稲の栽培体系マニュアルの作成
- ・生産者、実需者による現地検討会、情報交換会、マッチング

実施体制図



課題と今後の対応

●実証結果の概要

- ・平均乾物収量は「つきすずか」1.26～1.52t/10a、「つきことか」1.41t/10aとなり、「たちすずか」と同等以上の収量であった。籾重量割合(乾物)は10%前後、地域によっては1%を切っていた。
- ・稲WCSの発酵品質も優れており、酪農家や和牛繁殖農家に好評であった。

●今後の対応

- ・「つきことか」の試験ほ場を2地区に増やすとともに、品種の年次安定性や籾重量割合の検証を継続する。
- ・両種を活用した作期分散の栽培体系の検討を行う。